
IS<インフィニット・ストラトス>枯れた樹海

アズライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス<枯れた樹海

【Nコード】

N1157R

【作者名】

アズライト

【あらすじ】

めだかボックスの宗像形がいたらという設定ですだから殺す
キャラ崩壊や原作ブレイクなどがありますので苦手な方はブライ
ザバック推奨

プロローグだから殺す（前書き）

めだかボックスを最近読んで閃いた
処女作ですが宜しくお願いします

プロローグだから殺す

みなさんこんにちわ宗像形むなかたけいです

いい機会なので今日は昔話をさせてください

僕がその事実気付いたのは物心がついたばかりの頃でした

たくさんの方が行き交う町並みを見ていて僕はこう思ったのです

ああなんて殺しやすそうなか弱くてかすかで儂く頼りない生き物だと

頭を砕いても死んでしまう

首を絞めても死んでしまう

胸を刺しても死んでしまう

腹もを？いでもでも死んでしまう

なんだこれ？

こんな生き物

殺さずにいる方が難しいよ

僕の思考は殺害方法に満ち溢れていて人間を見ると殺したくなる

はずなのに彼女だけは違いました……彼女はなぜか見ても殺したく

ならない

そんな存在がいました

けれど彼女の姉が作り上げた殺害方法へいきのせいで彼女は転校をしてし

まいました

残った僕も殺人衝動アブノーマルのせいで転校することとなりました

中学で友達ができました。命がけで戦った彼のお陰で殺人衝動アブノーマルは少

しマシになりました

そして高校で運良く彼女と再開できたのです

周りは僕ともう一人の除き女性ですけど……

「宗像くん。自己紹介をお願いします」

「はい？」

気がつくとクラスの自己紹介が僕の番になっていたようだ

「あっ、あのえっと大声出してごめんね。でも自己紹介 あ から始まって宗像くんの む なんだよね。自己紹介してくれるかな？
ダメかな？」

生徒一人にここまで謝るなんてだから殺したい

「そんなに謝られなくてもやりますよ」

立ち上がるが自己紹介なんてしたことがない……困ったな
何を言えばいいのやら

「始めまして、宗像形です。趣味は人殺……植物鑑賞です。一年間
宜しくお願いします」

周りから「もっと喋って」みたいな視線が突き刺さるだから殺したい

「さあ自己紹介も終わったことだしSHRは終わりだ。諸君らには
これからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、
基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。
よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

僕と彼女の再開した場所は IS学園

IS正式名称 インフィニット・ストラトス 宇宙空間での活動を
想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ

総機体数は現在467機。これは開発者である篠ノ之束が現在失踪
中なためこのように微妙な数となっている。

そのため企業は新しいISを作るためには、一度壊してから新しい
のに作り直しているらしい

欠点としては女性しか使用できないこと

そして IS 学園 とはアラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS 操縦者育成用の特殊国立高等学校

IS に関連する人材はほぼこの学園で育成される。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、干渉されない。そのため、他国の IS との比較や、新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている

そして僕はこの IS を使用できる世界で二人目の男になった

ブローグだから殺す(後書き)

感想等ありましたら是非お願いします

第一話だから殺す(前書き)

一日に2回の更新です

お気に入り登録してください
た方ありがとうございます

第一話だから殺す

一時間目の授業は問題なく終わった。休み時間、クラスはまるで動物園のように他のクラスからの女生徒や学年が違う生徒まで僕ともう一人を見にきているらしいだから殺したい

「久しぶりだな、形」

「一夏か……」

話しかけてきたのは織斑一夏。もう一人の男でISの使える男であり僕の幼馴染だ

「六年ぶりだな。お前が転校してから」

「そうだね」

と昔話に花を咲かせていると

「ちょっといいか」

「あ？」

「……」

話しかけてきたのは幼馴染であり僕の殺人衝動アフノーマルが効かない筈ちゃんだった

不機嫌そうな顔。髪型も変わっていない為一目で分かった

「廊下でいいか？」

「お、おう」

「わかったよ」

廊下に移動したが移動した意味がないと思う。聞き耳を立てられて
いるのだから……

「……」
「……」
「……」

呼び出されたはいいが話が進まない

「そつえば……」

「な、なんだ？」

「篝ちゃん。去年剣道の全国大会で優勝してたね。おめでとう」

「へえ、そうなんだ。知らなかったぜ」

「一夏は新聞読まないからね」

おめでとうと言ったのだが口をへの字にして顔を赤らめた。なにか
変なこと言ったのかな？

「何でそんな事を知ってるんだ!？」

「何でつて、新聞で見たから……」

「な、何で新聞なんか見てるんだっ!？」

「毎日読んでるよ。中学の頃は暇だったから」

僕は新聞なんて読まないキャラだったらしい篝ちゃん的に

「そつえば、六年ぶりだけど篝ちゃんってすぐにわかったよ」

「あ、それ俺も」

「え……」

「髪型は昔と一緒にだったし、そのリボンは篝ちゃんが転校するとき
に僕が渡したものだからね」

僕が喋っている間。篝ちゃんは顔を赤くしながらしきりにうんうんと頷いていた

「そして篝ちゃん綺麗になっただね」

「なっ!?!」

「形、篝。教室戻ろうぜ」

一夏に呼ばれ教室に戻る。その間篝ちゃんは「形が私のことを綺麗とずっと呟いていた

見たまんまの感想を言っただけなのにな……

二時間目終了をチャイムが知らせる

それまで教科書を読んでいた山田先生は「それじゃあここまで」と言って退室していく。

僕の隣の席に座っていた一夏（おそらくを席順を操作した）は机の上に乗ったままの分厚い教科書を前にぐったりとうなだれていた

「……どうしたの、一夏」

「形………今の授業、専門用語とかの羅列で俺、全然わからないんだ……」

「お前もだよな？」という視線が向けられるが

「そう？　今の授業は事前に配布された参考書に全部載っていた事ばかりだったけど」

「あー、それは古い電話帳と間違っ捨てた」

「……頑張つて、一夏……」

一夏は更に精神的にダメージを受けたようだ

「後で僕のノートと参考書を貸すよ」

「ああ、ありがとう！ やっぱ持つべきものは気の利く幼馴染だな！」

「貴方がた、ちょっとよろしくて？」

一夏がこちらに迫ってきて感謝を示す中、僕達は後ろの方より声をかけた

振り向いた先にいたのは少しロールした長い金髪の青い瞳が目立つ少女だから殺したい

「聞いてます？ お返事は？」

「聞いているよ」

「聞いているけど…どういう用件だ？」

一夏が用件を聞くとわざとらしく声をあげた

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも栄光なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

一夏が押し黙る。一夏はこのようなタイプは苦手らしい。僕は殺したくなるだけだからどうも思わないけど

確かにISはかつての戦闘機や戦車すら凌ぐ最強の軍事力だ。だからISの操縦者は偉い、そしてISを扱えるのは原則女性だけ

現在では女≠偉いという構図が出来上がっており、男は完全に奴隷

もしくは労働力、と男尊女卑がひっくり返ったというより更に酷い状態になっている

実際に男性が街中でパシリ扱いされるなど日常茶飯事に起きている事だが、全ての女性がISを、それも高度に扱える訳ではないのだからそれはどうかと思う

「悪いな。俺達は君が誰か知らないし」

一夏の答えに僕も頷く

^{アフナーマル}殺人衝動のせいで自己紹介は聞いていなかったし、一夏は自分のことで大変だっただろうに…

しかしそれは彼女にとってかなり気に入らないものだったらしく、目を細めていかにも見下した口調で続ける

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリス

スの代表候補生にして、入学主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

周辺で話を聞いていた女子数人がずつこけ、さすがに僕も肩の力が抜ける

「あ、あ、あ……」

「あ？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？ もう一人の方は理解していらっしやるようなの！？」

「知らん。何なんだ形」

オルコットさんは「信じられない。信じられせんわ……」とブツブツ呟きながらこめかみを人差し指で押さえている

「国家代表のIS操縦者……つまり特別だよ」エリート

「そう！ エリートなのですわ！」

あ、復活した。びしつと僕達に人差し指を向けてくる。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただけ？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

オルコットさんは一応冷静だが少し目元がひくひくしている

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていきましたけどもう一人の方がマシですわね、期待外れですわ」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

「ふん。まあでも、わたくしは優秀ですから。まあ……泣いて頼まれれば優しく教えて差し上げてよ。何せわたくし、入試の実技試験で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「いや形に頼むからいい……って実技試験ってあれか？ ISを動かして戦うやつ？」

というか、一夏の中では僕は教育係か何かなのね……

「それ以外にありませんわ」

「俺も倒したぞ、教官」

「は？………」

「そついや形は？」

「普通に勝ったよ」

僕に振ってくる一夏。オルコットさんは驚きに目を見開いていたが僕の言葉を聞いて更に目を見開く

「わ、わたくしただだと聞きましたか？」

「女子ではっていうオチじゃないのか…」

三時間目開始のチャイムが鳴る

「また後で来ますわ！ 逃げないことね、よくって！？」

「授業の前にまずは再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席：まあ、クラス長だなじなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

突然の事にクラス中がざわめく。やりたくないなあ…

「はい、織斑くんを推薦します！」

一夏が推薦される。多分僕も推薦されるんじゃないかな。きっと

「私は宗像くんを推薦しまーす！」

やっぱりね

「では候補者は織斑一夏と宗像形つと……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

今更一夏が自分が推薦されたことに気がついたみたいだ

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないならこのまま投票で選ぶぞ」

「ちょ、ちょっと待った！ 俺はそんなのやらな……」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上覚悟をしろ」

「い、いやでも……」

反論しようとするが多分千冬さんには無意味だろう

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バン！つと机を叩いて立ち上がり甲高い声で異論を出したのは先ほどのオルコットさんだった

「そのような選出は認められません！ 認めたくありませんが実力から行けばわたくしか藤原さんが代表に選出されるのは必然ですが、物珍しいという理由だけでの男が選ばれるなど論外ですわ！」

「それなら自薦でもすればいいと思うけど……」

ヒートアップしそうなオルコットさんに冷静に突っ込みを入れる。
冷静に考えればそうなる。自薦他薦は問わないのだから

「そうですね！ イギリス代表候補のこのわたくしセシリア・オルコットがクラス代表に立候補いたしますわ！！」

「セシリア・オルコット追加と……他にいないか？ いないなら締め切るぞ」

「織斑一夏！ 宗像形！ クラス代表の座を賭けて貴方に決闘を申し込みますわ！！」

気がつくとも決闘にまでなっていた。でもいいやISなら殺さなくてすむし

第二話だから殺す（前書き）

第二話です。次の話は決闘になると思います

第二話だから殺す

「うう……」

放課後、一夏は真っ白になったボクサーのように精魂尽き果てていた。放っておくと魂が口から出てきそうなくらいだ

「い、意味がわからねえ、何語だよ」

「日本語だと思っよ」

一夏に頼まれて自習に付き合っていると

「ああ、織斑くんは宗像くんまだ教室に居たんですね。よかったです」

そこに現れたのは山田先生

「はい？」

「どうかしましたか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「あれ・・・俺達の部屋、決まってるじゃないやなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理矢理変更したらしいです。……織斑くん達は、その辺りのことって政府から聞いてます？」

最後は僕達だけに聞こえるように小声で言った

「ちなみに政府というのはもちろん日本政府だ。今まで前例のない」

男の『IS操縦者』だから、国としても保護と監視の両方付けたいよ
うだった

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最
優先してみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、
しばらくは相部屋で我慢してください」

「部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できな
いですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら…」

「織斑の分は私が手配しておいてやった。ありがたく思え。宗像の
分は郵送されてきたからな、部屋にあるだろう」

荷物か…特別何もないと思うんだけど…

「じゃあ、時間を見て部屋に行って下さいね。夕食は六時から七時、
寮の一年生用食堂で取って下さい。ちなみに各部屋にはシャワーが
ありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いま
すけど……えっと、その、織斑さんと宗像くんは今のところ使えま
せん」

「え、なんでですか？」

一夏が変態になってしまったようだ

「アホかお前は、まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか
？」

「あーそうだった…」

「じゃあ、私達は会議があるので。これで」

そうして先生たちは去って行った

「まあ、行くつぜ。」
「そうだね」

僕は部屋に入ると既にだれか居た。誰だろう？

「これは剣道の「ああ、やはり今日だったのか。外国の方だったのか？ だから遅れて……」

後ろから聞こえた声の主はバスタオルで体を隠したほう……

「おつ、おい、形。大丈夫か！？しつかりしろ！」

これが最後に聞こえた言葉だった

「なるほどな……ここがお前の部屋だというわけか」
「はい……そういうわけです、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
「い」

意識を取り戻した僕が何よりも先にしたことは謝罪と説明である、
納得してもらえたようで良かった

僕は女性に対する免疫がないからね

「そこまで謝らなくてもいい、しかし同室ならいると決めなければならんな。まずはシャワーだが「箒ちゃんが先でいいよ」む、そうかなら先にさせてもらうがなぜ私が先にしたんだ？」

「箒ちゃん剣道部でしょ。自室のシャワーのほうがリラックス出来ると思うし幼馴染だからね。少しはわかるよ」

「そうかそうか、私のことがわかるか。そうかそうか、ではシャワーは私が七時から八時お前が八時から九時だ」

「わかったよ。それにしても早く部屋を何とかしてもらいたいな…」

これは由々しき問題だと思う。僕が出血多量で死ぬなんてことになったら善吉くんともう会えないからね

「お前は私と一緒にの部屋が嫌なのか？」

箒ちゃんがいまにも泣きそうな顔で聞いてくる

「いやそういうわけじゃなくて、なんて言えばいいのか。箒ちゃんは昔よりも女らしくなってるからさ、このまま一緒にの部屋だと道徳的に問題があるだろうしなにより出血多量で死にたくないからね。シャワー浴びてくるよ」

「そ……そうか、私はもう寝ることにするよ」

箒 Side

本当のところ私はIS学園に来る気は全くといっていいほど無かった。姉が作ったISのせいで私は幼馴染と離ればなれとなり、気がつくとも両親さえとも別れていた

一夏がテレビでISを使える男として放送されていたとき驚きはし

だが別にIS学園に通いたくなるというわけではなかった

だが形が一夏と同じように放送されていたときは一生に一度あるか無いぐらいに驚いてしまった。IS学園は女性しかない学園。きっと無自覚で女性を落としてしまいそうだと考えた結果、IS学園への入学を決意してしまった

そして形に会えたのだが小学生の頃よりも殺人衝動が緩和されているようだった

一夏は殺人衝動を知らないだろう。私は形に直接聞かれたのだ、「どうして箒ちゃんだけ見ても殺したくないの?」と、聞かれたときは意味がわからなかった。詳しく説明をしてもらうと形は異常性であり、人間を見ると殺したくなってしまふのだがなぜか私だけ殺したくならないらしい

理由は今も不明であるがその時から私はよく形と行動をとともにするようになった

私は苛められていたのだが全て形が解決してしまった。私にはその姿が白馬の王子にしか見えなかった

恋をして優勝は確定と言われた大会で優勝したら思いを伝えるつもりだったのだがISのせいで引越しをさせられた結果不戦敗となり、思いを伝えられなかった

き、綺麗や女らしいなどと言われたが本人には自覚はないだろうだが……いつかは……

Side Out

時は流れて月曜日決闘の日だ。箒と一緒に一夏を鍛えながらの座学をやる一週間だった

もうすぐ決闘だというのに僕等のISがまだ来ない

『織斑くん宗像くん織斑くんっ！ 宗像くん！』

どこかに設置されたスピーカーが上階に居る山田先生の言葉をこちらに伝える。箒は声を追って上を見上げたが、僕は搬入口に視線をやった

『来ましたっ！ 織斑くんと宗像くんの専用IS!!』

『宗像、直ぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ』

一夏とジャンケンをした結果僕が負けたので先にオルコットさんと戦うことになっていた。問題はないけど見えてきたのは

『白』そして『黒』では足りないだろう『漆黑』がそこにいた

第三話だから殺す（前書き）

とりあえずのバトル。戦闘描写に自信が無いです
変だったら教えてください

第三話だから殺す

「あら、逃げずに来ましたのね」

オルコットさんが腰に手を当てたままふふんと鼻を鳴らす、様にな
っているなあと思いながら専用機 枯れた樹海ラストカーペットの武装を確認する
どうやら僕向きのようだ。全武装はすでに展開されていて暗器使用ほくぐりしゅく
戦える

「最後のチャンスを差し上げますわ、負けて惨めな姿を晒したくな
ければ降参するならば少し考えますわよ」

「遠慮させてもらつよ」

「そうですね、残念ですわね……お別れですわ!」

と言ってライフフルを撃ってくるがセンサーの伝える情報でわかって
いたので回避する

「君の武器は遠距離か…なら拳銃だ」

回避しながら射撃をする。雀の涙ほどだとは思うけどジリジリと削る

「くっ、踊りなさい! わたくし、セシリア・オルコットと 蒼いブルー・ティ
雫アイズの奏でる円舞曲で!」

と言うと同時に 蒼い雫 に搭載されている特殊装備 ブルーティ
アイズ を起動する自立機動型兵器であるBTはそれなりに不規則
な動きで攻撃をしてくるけれど避けられないわけではない…

「それを殺すには機関銃だ」

機関銃を掃射し一つ破壊する
タイムラグ無しでナイフを投擲しもう一つ破壊

「次はミサイルランチャーだ」

ランチャーを発射し残りの二つを破壊する。これで全部か…

「わたくしのブルーティアーズをそんな簡単に!？」

「だってこれは君と一緒に攻撃できない……僕の反応が一番遠い角度を狙ってくるのは読めてたからね。これくらい簡単さ……」

「くっ……」

「君に止めをさすのは太刀だ」

太刀を出し、殺そうとすると

「おあいにくさま、ブルーティアーズは四機だけではなくってよ!」

!？ ミサイル!? でも殺す

「やりましたわ! しぶとかったですがこれなら……!」

放たれたミサイルを大量の武器で無理やりガードし爆風の中加速。
太刀でライフルとミサイルの発射砲台を破壊する

「なっ!？」

「君のISの色が綺麗だから殺す」

太刀で刺殺

「君の髪の毛の色が綺麗だから殺す」

「君の瞳の色が綺麗だから殺す」

「決闘だから殺す」

「もう特に無いけど殺す」

多刀での斬殺、鈍器の圧殺、手榴弾で爆殺、自らの手で必殺

『勝者・宗像形』

気がつくとなんなアナウンスが聞こえた。次の相手は一夏か……が
んばろう

「さて……行くよ。一夏！」

「行くぞ！ 形！」

一夏の振り下ろす雪片式型を右手の太刀で受け止める。左の太刀で
刺殺しようとするが流石に避けられる

「じゃあ鈍器だ」

両手の鈍器で挟み込むように攻撃を仕掛けるが両方捌かれる。特訓
の成果と言う事が……

「わかったよ。一夏を殺す武器は本来は多丁これでいいと思うけど……」

「な、なんだよ!? その銃の数!?!」

「でも狼牙棒だ」

「……………!?!」

さて一夏はどうやって対応するかな? 善吉君と違って上着でなん
てできないだろうし

「これならそう簡単に避けられないよ。リーチがあるからねッ!」

狼牙棒を叩きつける。避ける気はなかったようでダメージを受けつ
つブレードで切り裂いた

「こんな武器。何時の時代のヤツだよ!」

「さあ? 何時の時代でもいいよ……………」

一夏のISには遠距離武装がないようで必死に距離を詰めて攻撃し
てくるけど全て迎撃する

「そろそろ終わらせたいからロケット砲で」

「うおりゃあああああ!?!」

暗器を出そうとしていると一夏の斬撃を喰らった。だけどエネルギー
の削り幅が大きい。何故だ?

「これが白式の零落白夜だ。シールドエネルギーを切り裂き、絶対
防御を強制的に発動させる……………その代わりこっちのシールドエネ
ルギーも使っちゃうけど……………」

「解説ありがとう。もう殺害方法は選ばない殺す」

全身から暗器を出す。一夏は驚いて声もでないようだ

「なっ!? そんなに速攻で展開できるとか聞いてねえぞ!?!」
「展開じゃないよ。仕込んであったんだよ」
「どっちも同じだ!」
「どうする? 降参でもするかい?」
「するわけねえ!」
「そうか……なら死ね」

斬り、潰し、撃ち、爆破し、ありとあらゆることをやった
一夏の攻撃を何度か喰らったため僕も一夏もエネルギーはもう少ないだろう

「これで僕の暗器は無くなったね。胸を撫で下ろすといいと思う」
「やっとか……これでマシになった」
「お互いエネルギーもわずか……次で決めさせてもらおうよ」
「武器もないのにやるのか。なら終わらせてやる!」

初期装備だけでは暗器の数が全く足りなかったからね。増やさないと
軽くなった僕はもうノロくないよ。一夏

「暗器は終わりだけど殺人はまだ終わらないよ」

死角からの強襲。これで終わりだ

「そうしてくることぐらい読めてんだよ! 何年一緒にいると思っ
てんだ!」

予想外の反撃でエネルギーがゼロになる。僕の負けか…

『勝者 - 織斑一夏』

その後オルコットさんと戦った一夏は勝利しクラス代表になることが決定しましたとさ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1157r/>

IS<インフィニット・ストラトス>枯れた樹海

2011年2月26日17時36分発行